

第3章 課題と解決のための方向性

本調査の結果、「1 子育てにおける父親不在」「2 専業主婦の孤立化、自己肯定感の低さ」「3 子育て支援団体などの支援者と親たちとの接点がない」という3つの主な課題が明らかになった。

本章では、この3つの課題に対する解決のための方向性を検討し、報告書のまとめとする。

なお、本章においては、共働き世帯の母親を「働く母親」、片働き世帯の母親を「専業主婦」と表記する。

1. 父親の育児参加の推進

課題 子育てにおける父親不在

本調査結果から、父親が家事・育児にかかる時間は、共働きであるか否かに関係なく、母親と比較して著しく短い。(P9 図 1-3)

一方、父親は子どもとの関わりにおける不安 (P20 図 2-2) や子育てへの負担感 (P8 図 1-2) は母親よりも少なく、子育てについての自信 (P8 図 1-2) は母親よりも「自信がある」と回答する割合が高かった。

このことから、一般的に父親の子育てに対する当事者意識が薄いことがうかがえる。

次に、「相談相手」(P31 図 4-2) について聞いたところ、母親は「配偶者」以外にも、「友人」、「親」、「保育士または幼稚園の先生」など様々な対象者がいるが、父親は圧倒的に「配偶者」、「親」となっている。また、「相談相手に対する満足度」を聞いたところ (P37 図 4-5)、父親は相談相手として、「配偶者」に対する満足度が約 86%であるのに比べ、母親は約 61%と低い。一方、母親の父親 (夫) 以外の様々な人に対する相談の満足度は「配偶者」よりも高い。

さらに、「父親の子育てへの参加」(P48 図 8-1) や「父親の子育てへの関与度」(P53 図 9-1) についても、母親から見ると、父親が思っているほど「参加している／関わっている」とは感じていないことがうかがえる。

また、幼稚園教諭及び保育士を対象とした調査 (P75 図 14) の質問項目は、「保護者自身のモラルや意識に関わる項目 (ア、イ、カ～コ)」と「家族の協力体制に関わる項目 (ウ～オ)」に大別できるが、保護者の気になる行動として多かったのが、「家族の協力体制に関わる項目」であったことから、父親の育児参加で解決できる部分もあるのではないかと推測できる。

これらのことは、父親個人の意識の問題だけではなく、社会 (中でも職場) におけるジェンダー意識による影響も大きい。

以上のことから「子育てにおける父親不在」が、課題として挙げられ、母親への影響はもとより、子どもの成長への影響もあると考えられる。

解決のための方向性

ア) 父親が親としての当事者意識を持つための集団遊びの場の提供

「ほしいと思う子育ての場」(P45 図 7-1) について聞いたところ、父親は「親子で一緒に遊べる場」を求める人が圧倒的に多い。

父親も自ら「親である」という当事者意識を持つためにも、もっと「父子」で過ごす場の提供等が必要であろう。そして、他の父親や地域の人との関わり合いや情報収集、共有の場となるように、「集団遊び」の場が有効と思われる。また、集団遊びの中で、家では見ることができない、我が子が見せる意外な表情も父親にとってはうれしい発見につながり、充実感を味わうことができる。

父親が子育てをともに担うことは、母親の育児不安の軽減に貢献するばかりでなく、夫婦の心の絆が深まるメリットもある。また、これにより、子どもは幼少期のみならず、成長した後まで父親との間で良好な関係が保たれる上、親自身も人間として成長できると考えられる。

イ) 父親向けワークショップ等の実施

幼稚園教諭及び保育士を対象とした調査によると、「家族の協力体制に関わる行動」について、気になる割合が高い。朝食を抜いたり、夜更かしをするなどの問題は、親の仕事や生活スタイルによる影響が大きいと推測されるが、父親、母親がともに親としての自覚を持ち、その役割を担うことが解決の糸口になるとも考えられる。

また、核家族化の進行により育児支援体制が低下している中、父親の協力は必要不可欠であり、育児の大変さ、母親の負担の大きさを理解するとともに、母親の子育て・家事をよくねぎらうなどの情緒的サポートの必要性も理解してもらう必要がある。

そのため、父親が参加しやすい休日や夜間等に自分自身の働き方の見直しを含めた、子育てに関する父親向けのワークショップを実施し、父親が楽しみながら参加できるような内容の充実を図る必要がある。また、父親は仕事関係者以外には、ざっくばらんに子育てに関して情報共有できる仲間が少ないことから、父親同士の座談会なども有効と考えられる。

さらに、夫婦間においても相手を尊重し合うことが重要であることから、相手の話をしっかり聴く＜傾聴＞と自分の考えを率直に言う＜話す＞がセットになった、アサーティブ・コミュニケーションについて学習する講座なども有効である。

2. 専業主婦の子育てストレスからの解放

課題 専業主婦の孤立化、自己肯定感の低さ

「子どもとの関わりにおける不安」(P24 図 2-4) について聞いたところ、働く母親と専業主婦を比較すると、専業主婦の方が子育てに関する不安を強く感じており、子育てを負担に感じる割合が高いことが分かった。

「父親が子育てに関わってほしい理由」(P60 図 12) においても、専業主婦の方が働く母親よりも「子育ての大変さを理解してほしいから」「自分の自由になる時間が欲しいから」も含め、子育ての負担軽減を求める回答が多かった。

「ほしいと思う子育ての場」(P46 図 7-2) では、専業主婦の方が働く母親に比べ、ほとんど全ての項目において、「ほしい」と回答している割合が高い。

また、「父親の子育てへの参加」(P50~51 図 8-2) についても、専業主婦の方が働く母親よりも「父親が子育てに参加していない」と感じており、「父親の子育てへの関与度」(P53 図 9-2) も専業主婦の方が「父親はあまり子育てに関わっていない又は関わっていない」と回答している。

「子育てに関するパートナーとの満足度」(P62~63 図 13-1、13-2) についても、父親よりも母親が、また働く母親よりも専業主婦の満足度が低い。

このように、専業主婦は働く母親よりも孤立していることがうかがえる。

さらに、「親として日頃感じていること」(P15 図 1-6) を聞いた中で、「社会から取り残されるような気がする」については、専業主婦の方が働く母親よりもそう感じている人が多い。また、「親になったことで人間的に成長できた」、「親であることに生きがいを感じている」については、専業主婦の方がそう思っている割合が低い。

このように、専業主婦は働く母親よりも自己肯定感が低いことがうかがえる。

以上のことから、専業主婦の「孤立化」と「自己肯定感の低さ」が課題として挙げられ、専業主婦のストレスや不安の解消の場の提供においては、こうした現状を理解したうえでの支援が欠かせない。

解決のための方向性

「ほしいと思う子育ての場」(P46 図 7-2) について専業主婦に聞いたところ、第 1 に「気分転換の場」が多く、続いて「子育て中の親と親しくなれる場」、「親の役割やしつけの仕方などを学ぶ場」、「自分自身のキャリアアップの場」となっている。

課題で述べたように「自己肯定感が低い」母親たちへの支援として、母親として求められる役割の中での相談や語り合いの場だけではなく、一人の人間として認められ、肯定してくれる相手や場が必要であり、以下の例も、そのようなジェンダーの視点を活かした支援が有効と考える。そのためには、ジェンダーの視点を持った支援者の育成も欠かせない。

ア) 子育てから一時離れる時間や場所の提供

専業主婦は働く母親に比べ、長時間、子どもと過ごし、孤立感や疎外感を抱きながら、ストレスやイライラを抱えている一面を垣間見ることができる。

そのため、子育てから一時離れる時間を持つ、例えば趣味など自分の自由な時間を自分のために使うようなリフレッシュの時間を持つことが心の安定につながり、子どもとゆとりのある心で向き合うことができるのではないか。

息抜きや自分のしたいことができるための支援として、いつでも気軽に訪れることができるフリースペースや子どもを一時預かってくれる場などが必要であろう。

また、女性の再チャレンジ支援のように、託児付の各種講座やセミナーも、母親の役割を離れた多様な学習の場として有効と考える。

イ) 子育て中の親たちとの情報共有の場の提供

子育て中の母親は「子育てに関する情報源」(P41 図 6-1) のとおり、母親の約半数が育児書から情報を得ている。子どもにはその子なりの個性があり、それに合わせた対応が必要であるにもかかわらず、育児書どおりにならないことを悩んだり、自信を失ったりしているのではないかと推測される。同じような年齢の子どもを持つ親同士でちょっとした情報共有を図ることで、悩みを分かち合えたり、取り越し苦労であることなどに気づくことができれば、もっと気持ちが楽になるのではないかとと思われる。

3. 不安を抱えながらも相談に訪れない親たちや、第三者から見ると「気になる」ような子育てをしている親たちへのアプローチ

課題 子育て支援団体などの支援者と親たちとの接点がない

子育てに関する不安（P19 図 2-1）を見ると、「子どもに思わず手をあげてしまうことがある」、「子どもと過ごす時間や会話が少ない」など、乳幼児を持つ親たちは様々な不安を抱えている実態がうかがえる。

また、幼稚園教諭及び保育士を対象としたアンケート調査（P75 図 14）によると、「子どもに夜更かしをさせている」、「しつけを幼稚園・保育園任せにしている」、「子どもに朝ごはんを食べさせていない」など、第三者から見ると「気になる」ような子育てをしている親たちの様子がうかがえる。

さらに、「子育てに関する相談相手」（P30 図 4-1）を見ると、友人や配偶者、親など、身近な人に相談しているものの、依然として第三者から見ると「気になる」行動が顕在化しており、「公的相談機関」や「子育てサークル」を活用している父親や働く母親はいずれも3%に満たない（P35 図 4-4）。

このように乳幼児を持つ親たちは不安を抱えていながらも、相談機関等を利用しておらず、また、第三者から見ると「気になる」行動をしていることに気づいていないのではないかと推測されることから、支援者がそのような親たちとどのように接点を持ち、支援していくかが今後の課題として挙げられる。

解決のための方向性

等身大の相談相手と身近な場所への相談窓口の設置

「公的相談機関」や「子育てサークル」を利用しない原因として「敷居が高い」、「身近な相談場所や情報収集の場となっていない」ことが考えられる。中でも、父親や働く母親にしてみると、忙しい日常の中で、普段行き慣れない場所であるため、足が遠のき、利用しにくいのではないだろうか推測される。

その課題を解決するため、例えば、ショッピングセンターのように普段行き慣れている施設の中に、相談窓口や子育て支援の場等を設けるのも良いのではないかと推測される。相談相手や情報提供者には、立場の近い、若しくは少しだけ先を行く人によるピアカウンセリングなども有効である。

また、そのような場は、幼稚園教諭及び保育士アンケートの結果のとおり、第三者から見ると「気になる」ような子育てをしている親たちへの「気づきの場」としての役割も期待される。

これまでの支援は相談に来た人に対する支援、いわば「待つ支援」を行ってきたが、これからは不安を抱えながらも相談に訪れない親たちや、第三者から見ると「気になる」行動をしている親たちの元へ出向いて接点を持ち、必要な情報を提供する、いわば「届ける支援」へ転換を図る必要がある。また、これまで関心のなかった人たちにキャッチされるような、そうしたニーズに沿った子育て支援を進めることも必要である。

4. まとめ

「子育て」は「親育ち」

核家族化の進行や夫婦共働きの増加、さらに人と人とのつながりが希薄化している今日、母親一人が子育てを担うのは困難な時代になっていることから、今後は、父親・母親がともに主体的に子育てに関わることができるような環境を整え、その実践に向けての情報の提供が必要となる。

また、子育て中の母親に対する支援は行われているが、専業主婦の中には、ストレスや不安を抱えながら、孤立した中で子どもを育てている場合もあることから、子どもの心の成長に悪影響を及ぼさないためにも、母親に対する支援の継続も必要である。

そのためには、男女共同参画の視点から、幼稚園教諭、保育士のみならず、広く子育て支援者の協力を得ながら、地域社会が一体となって子育て世代を支援していかなければならない。

少子化が進み、大人になるまで子どもと関わったり、世話をしたりする経験がほとんどないままに父親や母親になる人が増えてきた今日、「子どもとどう接すればいいのか」と、とまどい悩む親も多い。また、親自身が通常、身に付けているはずの生活者としての能力や、親としての意識の不足など、親になるための準備ができていない場合もある。

親が子どもを育てることにより、親自身も育ち成長すること、即ち「親育ち」が、これからの子育て支援の重要な課題であり、キーワードの一つとなるものと思われる。

